

人類働態学会編(2009年)『働態研究の方法』第1章「生活構造を見る」(18)

表題:	日本・インドネシア国際協働授業研究会の効果
著者:	中田英雄 ¹ 、Djadja Rahardja ² 、Juhanaeni ² 、Sujarwanto ³ 、Budiyanto ³ 、Asep A. Sopandi ⁴ 、Munawir Yusuf ⁵ 、Suparno ⁶ 、柿山哲治 ⁷ 、岡川 暁 ⁸ 、草野勝彦 ⁹
所属:	¹ 筑波大学教育開発国際協力研究センター、 ² インドネシア教育大学、 ³ 国立スラバヤ大学、 ⁴ 国立パダン大学、 ⁵ 国立3月11日大学、 ⁶ 国立ジョグジャカルタ大学、 ⁷ 活水女子大学、 ⁸ 日本福祉大学、 ⁹ 元宮崎大学
筆頭著者Eメール	nakata@criced.tsukuba.ac.jp

キーワード

インドネシア、特別支援教育、国際協働授業研究会、参加型研究協議会、国際協働授業研究会モデル

ねらい

わが国では、教師の授業を同僚や他の教師が観察し、授業直後の研究協議会でその授業について討議する授業研究会は学校行事の1つに位置づけられ、一般に公開されています。ところが、日本以外の国にはこのような授業研究や公開授業の文化はありません。1988年からインドネシア教育大学と交流してきた実績に基づいて、大学関係者と協議し、インドネシアで授業研究を実施しました。この授業研究を国際協働授業研究と命名し、参加型の授業研究が現地で受け入れられるかどうか検討するとともに国際協働授業研究会のモデル開発を試みました。

方法と結果

<方法>

第1回国際協働授業研究会を2004年12月にバンドンの知的障害特別支援学校と聴覚特別支援学校で開きました。現地でインドネシア教育大学副学長を中心にして実行員会を開き、3日間のプログラムを検討しました。日本の現職教師3名が参加し、体育と算数の授業をそれぞれ1回行い、次にインドネシアの現職教師と協働で授業を行いました。インドネシアの教師も算数と体育をそれぞれ1回行いました。日本とインドネシアの教師は指導案を作成し、それぞれの国の言語に翻訳されました。授業後に参加型の研究協議会を開き、よい授業とは何かについて協議しました。会期中に質問紙を配付し、閉会前に回収しました。参加者は現職教師、校長、大学教員、学生、保護者、行政職員で、インドネシア教育省の支援を受けました。活動の様様をビデオに収録しました。参加者は約150名でした。

第1回の結果を受けて、基本的な実施プログラムが固まり、以後、第5回まで両国の教

師が算数と体育の授業を行うとともに協働授業を行い、指導案を作成し、参加型の研究協議会を行うという形式が出来上がりました。

その後、2005年にスラバヤ（参加者約150人）、2006年にパダン（参加者308名）、2007年にソロ（参加者184人）、2008年にジョグジャカルタ（参加者236人）で協働授業研究会を開き、国立スラバヤ大学、国立パダン大学、国立3月11日大学、ジョグジャカルタ大学、ジャカルタ大学及び各地の知的障害特別支援学校の協力を得ました。

<結果>

2004年にバンドンで開いた国際協働授業研究会を始める前に、この会は日本とインドネシアの授業を比較することではないこと、日本とインドネシアの授業を参観してよい授業とは何かを一人ひとりが考える場であることを強調しました。体育の授業で日本の教師は古新聞を教材に用いました。これは参加者の目を引きました。算数の授業でも日本の教師は安価な教材を用いていました。参加型の研究協議会では、参加者をグループに分け、大学教員が司会者となり、よい授業について参加者の意見をまとめました。参加者の記入した紙切れを司会者が集め、参加者とともに分類しました。会の最後に、各グループの代表がよい授業について発表しました。インドネシア教育大学の代表は、よい授業を以下のように整理しました。

- 1) 豊富なコミュニケーション
- 2) 教師の豊かな表情
- 3) 児童をほめる行為
- 4) 教材・教具の工夫
- 5) 楽しい授業
- 6) 多要素を含んだ授業
- 7) 活動的な授業

2006年6月にインドネシア教育省特別支援教育課と国際協働授業研究会開催に関する覚書を結び、2006年から開催する国際協働授業研究会はインドネシア特別支援教育現職教員研修として正式に認められ、参加者に単位が授与されることになりました。また、参加者は全国から選抜されるようになりました。

2007年のパダンの研究協議会では、校長グループから協働授業研究会は普及に値するよいモデルであり、プロの教師は文化の違いを乗り越えることができるとの評価を受けました。また、教員グループからは、子ども中心の授業がよい効果を生むこと、身の周りにある安価なものを教材に活用できることがわかったなどの意見がありました。

2008年のジョグジャカルタで行ったアンケートの調査を紹介します。

今回の授業研究会は特別支援教育の質の改善に有効だと思いますかの問いに参加者236人の99%がそう思うと回答し、インドネシアでも授業研究を取り入れるべきですかの問いに87%がそう思うと回答しました。自分の町でも独自に授業研究会を開くことができますかの問いに対しては、69.5%ができると回答しました。

図1から図5までインドネシア各地で開いた国際協働授業研究会の活動状況です。図6は参加型研究協議会の模様です。図8は、国際協働授業研究会のモデルです。5回の経験をとおしてこのようなモデルを開発しました。



図1. バンドン
(2004年)



図2. スラバヤ
(2005年)



図3. パダン
(2006年)



図4. ソロ
(2007年)



図5 参加型研究協議会 (パダン)



図6. ジョグジャカルタ (2008年)



図7 ジョグジャカルタ (2009年)

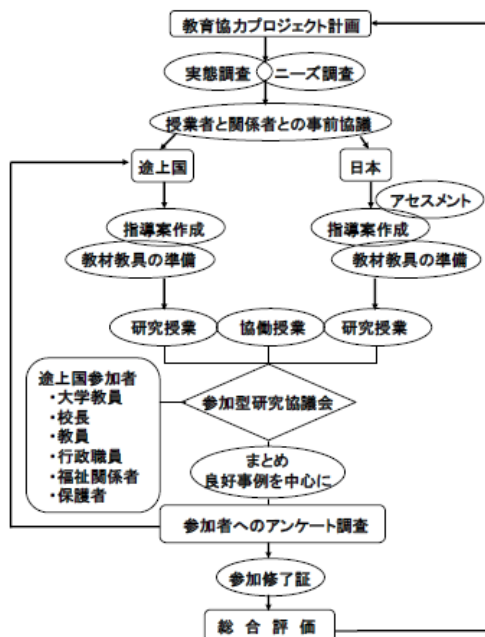


図8. 国際協働授業研究モデル

まとめ

日本型の授業研究がインドネシアの特別支援教育分野で前向きに受け入れられたと感じました。インドネシアにはゴトン・ロヨン(gotong royong)という伝統的な価値観、つまり相互扶助の精神が息づき、人々はたえず妥協しながら、ねばり強く一体化を求める能力をもっているといわれます(アリフィン・ベイ、1995)。将来、インドネシア教育省の支援と全国の大学の協力でゴトン・ロヨンを背景にしたインドネシア独自の授業研究が開発されることでしょう。改善とは、良好事例の存在に気づき、仕事や生活の場面に活かしていくことにあると思います。第6回授業研究会は、2009年8月にインドネシアの人たち自身の手によってマカサル大学で開催されます。

参考文献

1. アリフィン・ベイ, 1995. インドネシアのこころ. メコン.
2. Abin Syamsuddin Makmun, 2003. Educational systems for children with special needs in Indonesia (pp.10). The Education University of Indonesia.
3. Kogi, K., 2006. Participatory methods effective for ergonomic workplace improvement. *Applied Ergonomics* 37, 547-554.
4. 小木和孝(2006). 国際協力における労働科学の役割. *労働科学* 61(6), 325-328.
5. Lewis, C. and Tsuchida, I., 1998. A lesson is like a swiftly flowing river: Research lessons and the improvement of Japanese education. *American Educator* Winter, 14-17, 50-2.
6. Lewis, C., 2009. What is the nature of knowledge development in lesson study? *Educational Action Research* 17(1), 95-110.
7. O' Sullivan, M., 2006. Lesson observation and quality in primary education as contextual teaching and learning processes. *International Journal of Educational Development* 26, 246-260.
8. Stigler, J. W., Hiebert, J., 1999. *The teaching gap: Best ideas from the world's teachers for improving education in the classroom*. New York: Summit Books.

謝辞

これは科研費(17252010)の補助を受けて行われました。